

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：33915
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18K00223
 研究課題名（和文）地域コミュニティ資本を活用した移動式屋台型アートツールと対話型コンテンツの開発

研究課題名（英文）Development of mobile stall art tools and interactive content utilizing local community capital

研究代表者
 堀 祥子（HORI, Sachiko）
 名古屋女子大学・文学部・准教授

研究者番号：40626230
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：現代社会において人々は生活の中でこれまで以上に多様なコミュニケーションを求められている。そこで、移動する装置を目印に集まる人々を対話的な芸術表現活動でつなぐワークショップコンテンツの完成を目的とした。研究期間内において、経過と成果を国内外の学会での発表を行った。また、研究者以外の領域の研究者らを招聘した国内での自主シンポジウムや展覧会形式の成果発表会を開催した。開発したコンテンツは、保育・幼児教育の掲げるねらいと目的が単体ではなく相互に関連しあう構造となるように考案した。結果、人間関係と表現を核に他の領域が実装され、感染症流行下でも実践可能なハイブリッドなコンテンツを創出することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果が、今後、アートが人に何をもたらしているのかを検証し、地域資源がアート活動と結びつくことで生活をより豊かにしていくことの可能性と、コンテンツのカリキュラム化等の発展的研究への課題定義となった点に学術的意義がある。

本研究でのコンテンツ開発と実践は、研究者がそれをアートパフォーマンスとして活動していくことで研究成果を社会へ開くことにつながる。期間中には世界的な感染症流行があったが、実践を継続することで、多様化する人間関係や社会的経験の質の変化が取り巻く地域や社会環境の課題を見出し、人が穏やかに協働しながら自らの力で解決して乗り越える手段となる可能性を示したことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In today's society, people are required to communicate more diversely than ever before in their daily lives. Therefore, we aimed to complete a workshop content that connects people who gather around a moving device with interactive artistic expression activities. During the research period, the progress and results were presented at domestic and international conferences. In addition, we held independent symposiums and exhibition-style presentations in Japan, inviting researchers from other fields.

The content developed was designed so that the aims and objectives of Japanese childcare and early childhood education would be interrelated rather than stand-alone. As a result, other areas were implemented with human relations and expression at the core, creating a hybrid content that can be practiced even under infectious disease outbreaks.

研究分野：美術教育、アートコミュニケーション

キーワード：地域資源 アート ワークショップ コミュニケーション 対話

1. 研究開始当初の背景

研究者らは、研究開始当初から現在までに、子育て支援に関する専門分野を活かし、地域の子どもやおとなを対象にした、ものづくり教育や課外活動、余暇活動を学内外で実施している。その背景として次の2点に着眼した。

-背景1. 「社会的経験の質の変化」による地域社会共同体の困難さ

近年、人間の社会的経験の質が大きく変化している。核家族や単身世代の増加、衣食住の環境の変化、子育て環境や働き方の多様化、SNS等によるコミュニケーション方法の変化も後押しし、人同士の対面を避け、孤立感を持つ人が増加したといわれる。

-背景2. 地域コミュニティと人間関係を「結び直す」ための場の形成の試み

東日本大震災以降、一度絶たれた地域コミュニティと人間関係を結び直すために、ワークショップ形式の「語りの場」が、哲学カフェの実践等の社会的な知見から持たれている。芸術的な知見からもアーティストが中心となり、地域コミュニティの交流などを目的に「場」を形成する活動も見られる。それらを、従来あった地域の祭りの代わり、もしくは並行して芸術祭とし、従来から暮らす人と新たに流入した人が共に楽しむプロジェクトも実施されていた。

2. 研究の目的

我が国及び諸外国に見られる、祭りの山車や、街角やガード下に現れる軽食などを取り扱う移動式の屋台に集う人々には、初対面同士でも臨機応変にコミュニケーションをとりながら、生活の知恵や地域の技術や文化を受け継ぐ姿が見受けられる。

そこで、研究者が各地のアート・プロジェクトなど地域コミュニティに点在する「場」に飛び込み、移動する装置を目印に集まる人々を対話的な芸術表現活動でつなぐことにより、多様化する人間関係、多層化する地域社会における状況学習的コミュニケーションを引き出すワークショップコンテンツの完成を目的とした（図1）。

-目的1. 表現活動によって人と人がつながり、「相互交渉の実践共同体」となること

研究者らの装置とコンテンツをメディアにし、各地で開催される芸術祭などに集まる人々を周辺的参加に誘う。装置とコンテンツによって主体的かつ双方向的コミュニケーションを体験し、その楽しさや美しさを味わうことができるアート作品としたい。将来は、相互交渉の実践共同体として主体的に社会的に滑らかに接続、個々の経験知を地域コミュニティで活用し、穏やかで円滑な協働的活動がやがて未来を創造する人材の育成への期待も出来ると考える。

-目的2. 地域コミュニティが持つ「経験知」と「実践知」をフィールドワークする

研究者らは、学内外でのワークショップ等の実践で培ったファシリテーション能力で参加者の対話を引き出すことを目的とする。地域に暮らす多様な人々の知見を対話的にフィールドワーク、エピソードを多く集めることで、大学内などの特定の場では得られなかった広がりある対話が期待できる。その要素を取り入れたコンテンツを練り上げ、次の地域でのワークショップ実践へつなげる。

-目的3. 「多様化・多層化する人間関係」を取り持つ対話型ワークショップの提案

現代社会において人間関係は多様化、多層化している。フィールドワークで得られた知見にアートの視点を加えたコンテンツを完成し、対話型ワークショップで地域に還元、循環するサイクルの構築を提案する。社会的経験の質の変化が取り巻く環境の課題を見出し、人が穏やかに協働しながら自らの力で解決し、乗り越える手段となると考える。

3. 研究の方法

以下に示す方法1.から3.を、本研究で制作する移動する装置を活動のメディアとして開発するコンテンツと一体のものと捉え、アートパフォーマンス活動として展開した。期間は当初3年間（H30年～R2年）としたが、世界的な感染症流行のため1年間延長し、R3年までの研究とした。

-方法1. 移動屋台型アートコミュニケーション装置と対話型ワークショップコンテンツ開発

コンテンツの内容は、社会資本（地域の市場や商店街など経済活動の場）と自然資本（先人が築いた生産環境等、文化や慣習を含むインフラ）を由来とした。

-方法2. 考案したコンテンツによる対話型ワークショップ実践の試行・改良・展開

開発した装置と考案したコンテンツを地域コミュニティに開き、そこでの一連の活動や対話および時間と空間を「アート制作行為」と位置づける。実践開催地の状況や背景によって参加者を募り、5～10人程度の比較的小規模グループのワークショップ形式でコンテンツを実践した。

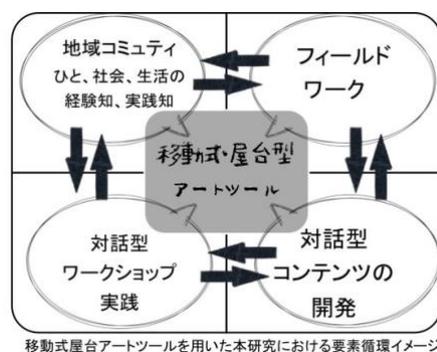


図1 本研究方法論イメージ

-方法 3. アンケートおよび音声等記録による質的分析とコンテンツの完成

研究者と参加者が対面しての活動とした。その様子は音声や動画等の記録し、さらにアンケート調査により質的分析を行った。人間関係における状況学習的コミュニケーションを引き出すコンテンツとなりえるかを検証し、その内容を完成させることとした。

4. 研究成果

研究期間内において、経過と成果を国内外の学会での発表を行った。また、研究者以外の領域の研究者らを招聘した国内での自主トークセッションとシンポジウム、最終年度には展覧会形式の成果発表会を開催した。

開発したコンテンツは、保育・幼児教育の掲げるねらいと内容の5領域である、

- ① 人間関係（子育て、介護、近所付き合い、地域との関わり方等）
- ② 言葉（言語、心理学や哲学等）
- ③ 健康（衣・食・住に関わる事象等）
- ④ 環境（地域社会、自然科学等）、
- ⑤ 表現（美術・音楽・パフォーマンス等）

が、単体ではなく相互に関連しあう構造となるように配慮、考案した。

結果、どのコンテンツも、①人間関係と⑤表現が核であり、開発を重ねるごとに他の領域が実装され、最終的には各コンテンツの要素を組み合わせることで、①から⑤の全ての領域を含む、ハイブリッドなコンテンツを創出することができたことを報告した。

このことは、本研究の期間内には世界的な感染症流行により活動に制限がある期間も含まれている。その間も研究活動を止めないように工夫し、実践を継続することができた要因となったことも示唆した。今後の多様化する人間関係、社会的経験の質の変化が取り巻く、地域や社会環境の課題を見出し、人が穏やかに協働しながら自らの力で解決し、乗り越える手段となる可能性を示した。

-1. 移動屋台型アートコミュニケーション装置開発について

研究開始時より、図2に示す移動屋台型アートコミュニケーション装置(以下、屋台とする。)を設計し、ツーバイフォー材を中心にした材料で制作した。主な特徴は次の通りである。

- ・材料…屋台の車体部分には運送用の木製の平台車を利用した。躯体部分にはツーバイフォー材を加工して組み立てた。これらはホームセンターなどで容易に入手可能であり、誰でも製作できるように配慮した。
- ・天板…取り外しが可能。内部には棚板が設けてあるため、実践に必要なものを一式納めることができる。
- ・フラップテーブル…跳ね上げ式になっており、研究者の手元の作業や実践参加者に向けた資料置きスペースとしても利用可能である。内部の棚板の物資の取り出し口も兼ねている。
- ・有孔ボード…S字フックを穴にひっかけ、制作物等を吊り下げると展示スペースになる。
- ・持ち手…ボルトにより取り外し可能となっている。写真は短い持ち手のものだが、長い持ち手に変えることで、内側に人が入り、引き手として機能するようにした。



図2 本研究で開発した移動屋台型アートコミュニケーション装置

-2. 対話型ワークショップコンテンツ開発について

対話型ワークショップコンテンツ(以下、コンテンツとする)研究者らが所属校で関わる保育・幼児教育の掲げるねらいと内容の5領域の区分を基に考案し、地域の博物館やNPO 法人と協働して実践した。

研究者は事前に協働先の関係者と打ち合わせした上で、当日は参加者と関わりながら実践を進めた。どのコンテンツも基本は親子を対象としている。しかし、年齢を問わず、ひとりでもまた友人同士などの参加でも対応できる内容とし、参加希望がある時には受け入れた。

-コンテンツ 1. インスタントカメラ(以下カメラとする)を用いた造形活動と対話のコンテンツ

デジタルとアナログをつなぐ造形的視覚教材として位置付け、表現活動および研究者らがファシリテーターとなり進行する対話型鑑賞活動を次の4点のコンテンツを開発した。

- ① 子どもの視点で地域環境の撮影、額縁の作成、親子での鑑賞会を開催する。
- ② カメラを使った視覚玩具ソーマトロップの制作と動作の撮影、電子黒板による投影による親子鑑賞をする。
- ③ 地域の博物館にて、展示物を親子で鑑賞しながらカメラで撮影、学芸員の解説、撮影物の全体鑑賞会を開く。
- ④ 絵画作品の登場人物に扮した親子が互いにカメラで撮影、他の参加者の撮影物を相互鑑賞する。

-コンテンツ 2. 手元に簡単な作業を置きながら、地域に対話の場を開くコンテンツ

研究者らはこれまでに手元に簡単な作業があることで、比較的小規模のグループ活動において、良好な人間関係で円滑な交流の場を持つことができることを明らかにしている。その経験を基に、研究者自身が街に飛び込み、比較的軽度な創作活動を取り入れてその場の即興で良好な人間関係を築いていくためのコンテンツを2点、開発した。

特に②は、上記コンテンツ 1. に対話の機能を強化した発展的なコンテンツとなった。

- ① 研究者らは、商店街や公園の一角に集まり一般来場者を簡単な手芸や造形行為に誘い、専門分野の研究内容からテーマを設定して対話する様子をその場で公開する。
- ② 研究者の居住地域にある商店街の店主や他大学の地理学専門の研究者と協働し、大学生や一般参加者とともに商店街を歩き、発見した見所をカメラで撮影、自治体の発行する観光地図に撮影物を切り貼りして地図を再構築し、全体鑑賞会を行う。

-コンテンツ 3. 屋外での食べる行為を伴う対話の場を開くコンテンツ

前述のコンテンツ 2. で示した対話型コンテンツを発展させて、より広く対話の場を展開していくコンテンツを開発し、屋外の活用とともに実践した。

研究者ら以外の専門家数名を招聘して協働する活動を、2点のコンテンツとして開発した。市街地近郊の公園で開催されるマーケットイベントでの実践であり、開放的な空間で、不特定多数の来場者を地域内外から迎えて、軽い飲食を伴いながら、来場者と研究者が対話を楽しむ仕掛けとした。研究者らは、専門分野の研究内容を子育てや暮らしについての日常的な話題に結びつけて準備をしておき、それらを飲食店のお品書きと同じように参加者に提示した。参加者はそこから興味のある話題を選択し、オーダーをする仕組みであった。

- ① 食材を炙る行為を通して、研究者らの専門領域からの話題提供について軽いおしゃべりを楽しむ。
- ② 地域の食材による軽食メニューの提供と並行して、研究者が振る舞いコーヒーのスタンドやDJブースに立ち、あるいは研究分野にまつわる本を持ち込んで、マーケットの来場者を対話へ誘う。

-コンテンツ 4. 感染症流行下でのオンラインとオフラインを取り混ぜたコンテンツ開発

2020年は、世界的な感染症流行によって人間の行動や活動が大きく制限される事態が起こり、予定していたコンテンツの実施もやむなく休止や延期となった。

しかし、この間に各教育機関ではオンライン授業のための方策が試行され、インターネットを利用した会議システムも充実した。それらを利活用し、これまで記述したコンテンツ 1. から 3. までの内容を再編成した上で、オンラインとオフラインを取り混ぜる工夫を取り入れたコンテンツを開発した。

どの実践も、参加者はオンラインで参集し、あらかじめ研究者らが準備したワークショップキットを送付して、当日は手元に置きながら実践に取り組んでもらう仕組みとした。

事前調査や打ち合わせを対面時よりも回数を重ねて、リハーサルも行った上で、当日は博物館館長や他大学の地理学の研究者の解説や研究者が進行や機材操作をするなどで協働した。

- ① コンテンツ 1. ①を基に、オンラインで手元の作業を中心に撮影した昆虫標本技法の実演と絵画技法であるモダンテクニックとの共通項などの魅力を伝えるワークショップである。参加者は、事前に送付される標本制作キットを手元に置き、実際に手を動かし、質問や感想などを述べながら参加する。
- ② コンテンツ 2. ②を基に、オンラインの参加者には、研究者制作のオリジナルマップと商店街でしか買えない菓子やコーヒードリップパックなども同封したキットが事前に送付される。当日は、研究者がライブカメラを手に持ち、商店街を歩きながら見所を紹介する。参加者は研究者と会話をしながら、その情報のマップに書き込みをしていくワークショップである。

-コンテンツ 5. 造形活動に音楽表現とお話し読み聞かせを加えたコンテンツ開発

次の項で示すコンテンツ 6. と同時に開催するために開発した。研究最終年度の12月の開催であったため、子どももおとなも楽しめる会と位置付け、プロの音楽家を招聘し、器楽演奏がお話を読み聞かせと同時に進行する音楽会を企画した。

親子やおとなの一般参加者が、創作活動の時間を音楽の合間や、あるいは聴きながら自由に活動できるように設定し、研究者や音楽家と表現活動について対話しながら進めていく時間を持った。

- ① 音楽演奏会にて、研究者自身が楽曲の調子に合わせて行うライブペイントの公開
- ② 音楽演奏を聴きながら、そこからイメージしたことを円形のシールやカラーセロファンを切って並べて表現し、ラミネートシートに挟み込むことで光が透過すると、その影が透けて床や壁に映るオブジェ作り

-コンテンツ 6. 展覧会形式の成果発表会とシンポジウム

研究の最終年次に、本研究の経過と成果を地域に還元する目的で行った。開催場所はコンテン

ツ 2. と 4. で登場する商店街でアート活動に関心があるオーナーが経営するカフェ兼ギャラリースペースである。ギャラリー側にはコーヒー類の提供を依頼し、軽い飲食を伴いながらのおしゃべり場が展開されるように配慮した。商店街近郊の一般参加者を対象に対面で開催した。

- ① これまでの研究内容や活動過程と、学会で発表したものをまとめたものをポスター形式で紹介する。本研究を発展させた次の研究活動の展望についても加えた展示構成である。(図 5)
- ② コンテンツ 2. と 3. を基にして、他の領域の研究者も招聘して自主シンポジウムを企画・実施する。研究内容の今までとこれからをテーマに、それぞれの知見を講演する。その後、フロアからの質疑応答とフリートークの時間を持つ。

-3. コンテンツ実践の成果

これまで研究者らがフィールドとしてきた地域(名古屋市、岐阜市、北九州市)を活用したこともあり、実践は順調であった。その様子は、写真や動画、アンケート等の記録物から分析を行った。これにより冒頭で掲げた目的 3 点を実現可能にするコンテンツ開発になり得たと考える。

- ① コミュニケーションスキルの培いの場

本研究は、保育・教育のねらいと内容の 5 領域と、アート活動を連動させて活動する対話型コンテンツの開発と実践であった。対面下でのコンテンツ実践における参加者らのコミュニケーションに着目した上で、参加した子どもの状況に注視すると、

- ・特に、幼児期・児童期前半では、他児の撮影行為への注視や接近がみられる。
- ・児童期後半では、保護者だけでなく、実践者や専門家との対話が多くみられる。

上記のことから、実践による「多様な対話」や「子どもの主体性」の促進の可能性があり、異年齢の集団によるワークショップは、多様な子どもの表現や発想を引き出すコンテンツであることを実証し、学会にて報告した。

実践は、「より深い学びを経験する場」と、発達における「足場かけの場」として機能したと考える。参加者は、他者との対話や鑑賞によって、対象物や他の参加者の作品への興味関心を広げながら表現活動に取り組むことが出来ていた。参加者と研究者間の対話も盛んであり、互いの社会的なコミュニケーションスキルを培う場としての役割や、比較的軽い悩みをおしゃべりで発散する子育て支援の場ともなる可能性を示唆した。

- ② 対話での話題の多様性

コンテンツ実践において、一般参加者と研究者が一緒に共通の創作活動をすることで、提供される話題と手元の作業の間を行き来することが可能な状況であった。また、他の開発したコンテンツにおいては、他領域の研究者の参加で話題の多様性があり、それぞれの知見からテーマについて語られることで、その場に居合わせた一般参加者との対話のきっかけとなり、対話が進む中で変化する興味関心事も行き来することが示された。



図 3 会場で目印となる屋台

- ③ 屋台の利活用

開発した屋台(図 3)は、コンテンツ実践時には、受付の役割や研究者のパフォーマンスの舞台、ワークショップスペースにもなり、開発したコンテンツとともに利活用することができた。しかし、コンテンツの実践とともに改良を加えながら使用し、最善の形態に練り上げる予定であったが、感染症流行の影響で不十分であった。

- ④ 感染症流行下における学びのイノベーション創出の可能性

オンライン実践では、対面時よりも活動環境や運営面を細やかに整えることと、複数名でチーム運営が必要とされた。

造形活動の中でも、細やかな手元の作業の参照を必要とするものは、オンラインは相性が良いことや、静かにじっくり取り組むことが必要な作業性がある内容にはオンラインは向いていることが明らかになった。また、日常的な環境で安心してゆっくり集中できること、画面上は年齢や立場に関係なく表示されるため、対等な関係となることが示唆された。

参加者同士の空間的な距離が、初対面の集団であっても自発的な質疑を促進するなど「オンライン」ならではの効果も実証された。

今後は、「オンライン」と「オフライン」それぞれの特徴を活かしながら、時代の状況や社会の問題に即した新たな展開の模索と、地域や多分野の専門家らとの協働を重ね、単なる危機的状況への対応ではなく、多様な学びの在り方として学びのイノベーション創出の機会にコンテンツが契機となることを提案した。

- ⑤ 対面時での実践先との連携と信頼関係の維持

オンライン実践で重要なのは、対面時での実践先との連携と信頼関係の基礎であるといえる。これまでの協働の積み重ねがあることで、コンテンツ実施のための環境を円滑に整えることができ、実践を成し遂げることが可能となった。今回のような感染症流行などの有事の際での実践の維持には、運営者・企画者・参加者それぞれの関係性の維持と、本研究の過程で開発したコンテンツの内容を取り混ぜた表現方法や対話方法のコンビネーションが必要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 堀祥子・水野友有
2. 発表標題 表現と対話で主体的に育む親子鑑賞活動の実践研究1ー地域資源と連動したカメラワークショップの開発と考察ー
3. 学会等名 第73回日本保育学会奈良大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水野友有・堀祥子
2. 発表標題 表現と対話で主体的に育む親子鑑賞活動の実践研究2ー人間関係に着目した発達行動学的検討ー
3. 学会等名 第73回日本保育学会奈良大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀祥子・水野友有
2. 発表標題 親子の協働対話型アートワークショップの開発と実践研究1ーインスタントカメラによる錯視を主題とした造形教材の考察ー
3. 学会等名 第58回大学美術教育学会岐阜大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水野友有・堀祥子
2. 発表標題 親子の協働対話型アートワークショップの開発と実践研究2ー親子間コミュニケーションに着目した行動観察による実証的検討ー
3. 学会等名 第58回大学美術教育学会岐阜大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 堀祥子
2. 発表標題 幼児の対話を育む親子表現活動の実践的研究～地域資源を活用したカメラワークショップの開発と考察～
3. 学会等名 第72回日本保育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀祥子・水野友有
2. 発表標題 オンラインによる地域連携アートワークショップの試行と考察1 造形活動を支える環境構築の視点から
3. 学会等名 第74回日本保育学会富山大会(ポスターセッション)オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 水野友有・堀祥子
2. 発表標題 オンラインによる地域連携アートワークショップの試行と考察2 他者との相互交渉に着目したオンラインとオフラインの比較
3. 学会等名 第74回日本保育学会富山大会(ポスターセッション)オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sachiko HORI
2. 発表標題 Designing a Pub-style communication system to connect parents, children and researchers
3. 学会等名 Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) conference20212021 Wellington, New Zealand / online (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

1. 「あら！ほお！? GIRL'S TALK ・お題『編み物する身体』」 / 堀祥子・水野友有・笠野由布子・齋藤亜矢・命婦恭子 / 北九州市・大講堂 / 2018年12月 / 自主シンポジウム・ワークショップ
2. 「旅する図工室展」 / 堀祥子・水野友有・東山幸恵・光崎雅代 / 岐阜市・ピッカフェギャラリー / 2021年12月 / 研究成果ポスター展示・ワークショップ・自主シンポジウム

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	水野 友有 (MIZUNO Yu) (60397586)	中部学院大学・人間福祉学部・准教授 (33707)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------